マムルーク朝時代のアレッポにおける イスラーム宗教施設
――ワクフと関与者の検討――

谷　口　淳　一

は　じ　め　に
第１章　ワクフ財の種類と分布
第２章　設立と維持への関与
　第１節　設立者とアレッポの関係
　第２節　アレッポ都市住民の関与
第３章　ダマスクスおよびエルサレムとの比較
お　わ　り　に

は　じ　め　に

先に筆者は，北シリアの中心都市アレッポに12-15世紀に設立された宗教施設に関して，設立数の推移，設立者の社会階層，機能の変化などについて時系列に沿って検討を試みた［谷口 2005］。しかしながら，紙幅の関係もあって，そこではこれらの宗教施設を支えたワクフについてはほとんど触れることができず，設立者については，社会階層に絞って分析をおこなうにとどめた。そこで本稿では，これらの点について，比較的まとまった情報が得られるマムルーク朝後期の15世紀に焦点を当てながら，以下のような観点から考察を試みることにする。

まず第１章において，アレッポ市街の宗教施設に対するワクフ財の種類と地理的分布について検討する。宗教施設を維持するワクフの場合，農地や商業施設など不動産がワクフ財として指定され，その経営から得られる収益が都市に設立された受益施設（ワクフ対象施設）のために用いられるのが普通である。つ

まり，ワクフは，受益施設が集中する都市部とワクフ財が分布する農村部を経済的に結びつける役割も果たしていた［岩武1994: 227-228; 三浦1995: 35］。したがって，ワクフ財の分布状況を見ることは，ワクフを介した都市アレッポとの経済的な結びつきがどの程度の範囲に及んでいたかを知ることにもつながるのである。

本稿で用いた主要史料の一つは，スィブト・イブン・アルアジャミー（Sibṭ Ibn al-ʻAǧamī, 884［1479］年没）が著したアレッポ地方誌『アレッポ史における黄金の蔵』（略号 KD）であるが，その活字本が1996年まで出版されなかったためか，マムルーク朝時代のアレッポについてこのような観点から論じた研究は見当たらない。アイユーブ朝時代については，エッデ（A.-M. Eddé）がアレッポを中心とした通商路を提示しているが，考察の中心は国外との交易であり，都市アレッポを中心とした域内経済に関する分析は見られない［Eddé 1999: 511-514, fig. 65］。

第 2 章では，アレッポとの関わりを軸に宗教施設の設立や維持に関わった人々について考察する。特に支配層(1)について，アレッポ地域に直接関わる職位にあるか否か，あるいは上位権力者であるカリフやスルターンが設立したのかどうかという区別に注目したい。政治権力者が宗教施設を設立する目的の一つとして，イスラームの保護者であることを顕示し民衆やウラマーの支持を獲得するという点が指摘されてきた(2)。しかし，このような動機を考えるためには，設立者が直接その地域に政治的な利害を有しているかどうかという点が重要であるにもかかわらず，従来の研究では，この点は明確に意識されてこなかったのである。この章の議論の中心はマムルーク朝時代となるが，比較のために12世紀からアイユーブ朝時代までの設立者についても分析対象とした(3)。

---

(1) 本稿で言う「支配層」とは，君主，王族とその縁者，家臣とその縁者，総督，軍人とその縁者を指す。

(2) マドラサの政治的機能に関する議論については，阿久津による学説史の詳しい紹介と批評があり，マドラサ以外の宗教施設に関しても参考になる［阿久津 1999b］。

(3) マムルーク朝期のアレッポについては，宗教施設全体を対象とした分析自体が存在しなかった［谷口 2005: 66-67］。アイユーブ朝以前については，支配層，特にアミールによる設立が多いことが指摘されているが，上記のような視点からの分析は見られない［阿久津 1999a; 湯川 1980（以上 2 点はマドラサについての研

また，宗教施設の設立について分析する場合，設立者として名を残した人物だけに注目しがちであるが，無名の人々が施設の設立や維持に寄与したことを示す記録も存在する。本稿ではそのような人々についても検討を加えてみたい。そして最後に，第3章において，以上の2章にわたる考察から得られた知見をもとに，アレッポの状況をダマスクスおよびエルサレムと比較検討する(4)。

本論に入る前に，本稿で扱う地域概念と用語の関係を整理しておく。まず「都市アレッポ」または「アレッポ市街」とは市壁内外の市街部を指す(5)。それに対して，都市アレッポを中心とした行政区域を「アレッポ地域」と呼ぶ。アレッポ地域が独立国家であることを示す場合は「アレッポ君主国」，地方行政単位であることを示す場合は「アレッポ州」と記すが，想定されている領域は同じである。なお，文脈から明確に判る場合や特に区別する必要がない場合には，単に「アレッポ」と記すこともある。

アレッポ地域の範囲は時代によって異なるが，カルカシャンディー（al-Qalqašandī, 821［1418］年没）の *Ṣubḥ* に記されているアレッポ州の範囲を基準に考えることとする。*Ṣubḥ* の記述は14世紀末ないしは15世紀初頭の状況を反映していると思われるが，それはアイユーブ朝アレッポ君主国の13世紀初頭における版図ともほぼ重なる［Eddé1999: fig. 63］。したがって，本稿が扱う時代においては，その範囲は比較的安定していたと考えてよかろう。

カルカシャンディーの記述によると，アレッポ州の北西側の境界は，アナトリア高原の南縁に沿って都市アレッポの北北東約180kmに位置するバハスナー（Bahasnā）へと至っている。この辺りが北端で，そこからさらに約100km東にあるユーフラテス川上流のカルカル（Karkar/Gargar）を結んだ線が北辺の境域にあたる。東の境界はユーフラテス川で，バーリス（Bālis）からはシリア砂漠の辺縁に沿って南西へ向かう。アレッポ州に属す最も南の属域（‘amal）と

究）；Eddé 1999:289（全般），397（マドラサ），402（ダール・アルハディース），426-429（修道場）]。

(4) 本稿で用いた主要史料および上記以外の研究史に関する問題点については「谷口 2005」の66-67頁を参照されたい。

(5) 前者は後者に比べて抽象的な意味で用いることが多いが，厳密に使い分けられているわけではない。

表１　アレッポの病院――12-15世紀――

No.	施設名	設立時期	設立者	階層	典拠
1	Nūrī	6（12）世紀中葉	Nūr Dn. Maḥmūd	支配者	KD 1: 445-447; Sih: 226
2	Arġūnī	755（1354/55）年	Arġūn al-Kāmilī	総督	KD 1: 448-449; IMA: 334
3	Bāb al-Ǧāmiʿ al-Kabīr	819（1416）年以前	Ibn *ḫrḫAz*	不明	KD 1: 448; IMA: 367
4	Banī al-Duqāq	9（15）世紀以前	Banū al-Duqāq	不明	KD 1: 448

して挙げられているのは，オロンテス川沿いのシャイザル（Šayzar）である。西の境界はオロンテス川の西に連なるアンサーリーヤ山地からアンティオキア，ルッカーム山地を経てアナトリア高原へと続いている［*Ṣubḥ* 4: 119-130］。

以上の領域に加えて，マムルーク朝時代に新たにアレッポ州に属すことになった領域として，カルカルからジュッラーブ（Ǧullāb）川，バリーフ（Balīḫ）川を結んだ線とユーフラテス川で囲まれる地域，キリキア地方，マラティヤ（Malaṭiya）周辺の地域が列挙されている［*Ṣubḥ* 4: 133-137］。これらの領域は，本稿ではアレッポ地域に含めないこととする。これら周辺の領域を除いて考えても，アレッポ地域の範囲は，南北約 300km，東西約 200km の広がりをもつことになる。

第１章　ワクフ財の種類と分布

本稿で分析の対象とした宗教施設は，12-15世紀にアレッポ市街に設立されたジャーミィ，学院，修道場，孤児の教室，墓廟，病院であり，すべてイスラーム関係の施設である。これらのうち病院を除く諸施設については，別稿において個々の施設に関する基本情報を提示した(6)。そこで本稿では，病院についてのみ**表１**に基本情報を掲げた。表には示さなかったが，いずれも市壁内に

(6)　谷口 2005: 82-93（表Ａ－１～Ａ－５）。各施設に関する情報の典拠は表中に示した。本稿では，各施設や設立者に関する典拠に言及する場合，原則として各表における番号を示すことで代える。以下，表１～５は本稿所収の表を指し，表Ａ－１～Ａ-5 とは「谷口 2005」所収の各表を示す。

立地していた。なお，中東における病院の歴史はイスラーム以前に遡り，またイスラーム時代にも医師に非ムスリムが含まれることがあった。このように，病院は他の宗教施設とは性格を異にする面もあるが，日々のコーラン読誦が規定されているなど，イスラームという宗教とは切り離せない施設でもある。したがって，本稿では病院も含めてイスラーム宗教施設ないしは宗教施設と総称する(7)。

これらの宗教施設に対するワクフ財に関して15世紀の時点で確認できる情報を稿末の**表 4** にまとめて提示し，受益施設ごとに，ワクフ財の所在地，アレッポ市街との位置関係，物件の種類を示した。受益施設が機能していても，そのワクフ財の一部が荒廃してしまうことがある。そのような場合，つまり14世紀以前の史料に記述があっても15世紀に存在が確認できない場合や，15世紀の史料が荒廃を伝えるワクフ財の情報は省いた。逆に，受益施設は休廃止になったものの，ワクフ財自体は他の施設のワクフに移管されて存続している場合は，注記したうえで表に含めた。

ワクフ財の所在地は，主に Dussaud 1927 と KD の校訂注を利用して同定し，アレッポ市街からの直線距離に応じて分類した。市街地の外に広がる領域でアレッポ市街からおおよそ10kmまでは「近郊」とした。以下，表中の「50km内」はおおよそ11-50km,「100km内」は 51-100km,「100km外」は101-150kmの距離にあることを示す。史料中にアレッポの地名であることが記されているものの位置の詳細が不明な場合は,「アレッポ州」と表示した。

種類欄には，ワクフ財の種類を示した。史料に農地であることが明記されていない場合でも，収益の分配比率や面積が示してあるか「取り分」(ḥiṣṣa) と記されていれば，農地からの収穫を示すと考え，農地に分類した。農村の地名が示されているだけの場合は,「農地？」と表示した。

さて，以上のようにして作成した**表 4** からどういうことが読み取れるだろうか。最初に留意しておかねばならないのは，ここに現れた情報が全体の中の一

(7) アレッポではアルグーニー病院［表 1：2］にコーラン読誦者を置く規定が見られる［KD 1: 449］。13世紀末にカイロに設立されたマンスール病院では，職員や患者から非ムスリムを排除する規定もあった［菊池 1992: 56-57］。

表 2　アレッポにおけるワクフ財の種類と地理的分布――15世紀――

	商工業	浴場	製粉	農地	農地？	その他	不明	合計
市街	19	1	0	0	1	3	0	24
市街？	5	2	0	0	0	0	0	7
近郊(～10km)	4	2	4	7	1	0	1	19
近郊(～10km)？	0	0	1	1	0	1	0	3
～50km	0	1	1	28	12	0	0	42
～100km	0	0	0	3	3	0	1	7
～150km	0	0	2	1	0	0	0	3
不明(アレッポ州)	0	0	0	2	0	0	1	3
ダマスクス州	0	0	0	2	0	0	1	3
不明	0	0	1	8	5	0	0	14
合　計	28	6	9	52	22	4	4	127

単位：件数

部分に過ぎないということである。ワクフ財に関する情報が全く得られない受益施設がかなりあるうえに，各施設のワクフ財も主なものに限られていると考えられるからである(8)。

今回収集した情報に拠る限り，異なる施設種の間でワクフ財の分布や種類に有意な違いは認められない。では，これらのワクフ財全体を一括して捉えると，どのような特徴が見えてくるだろうか。**表 4** からワクフ財の種類と位置区分ごとに件数を集計し**表 2** にまとめた。「商工業」欄の数字は，**表 4** の隊商宿，石鹸工場，店舗，市場，圧搾場，パン焼き窯の件数の合計である。「農地」には果樹園を含め，家屋，邸宅，厩，庭園は，「その他」とした。

表 2 から明らかなように，アレッポの諸施設を支えたワクフ財は，大きく二つのまとまりに分類できる。一つはアレッポ市街と近郊に存在した商工業施設および浴場で，主に都市におけるサービスを提供し賃貸料や手数料を得る物件である。また，小麦などを粉にする製粉場も，大消費地である都市アレッポの

(8)　表には含めなかったが，ウマイヤ・モスクを支えた主要なワクフ物件は，モスクを囲むスーク（市場）の店舗であったと思われる。803（1400）年にティムール朝軍がアレッポを蹂躙した際，諸スークが荒廃してウマイヤ・モスクの収入が減少したという記録がある［KD 1: 229］。表 4 の注（15）も参照せよ。

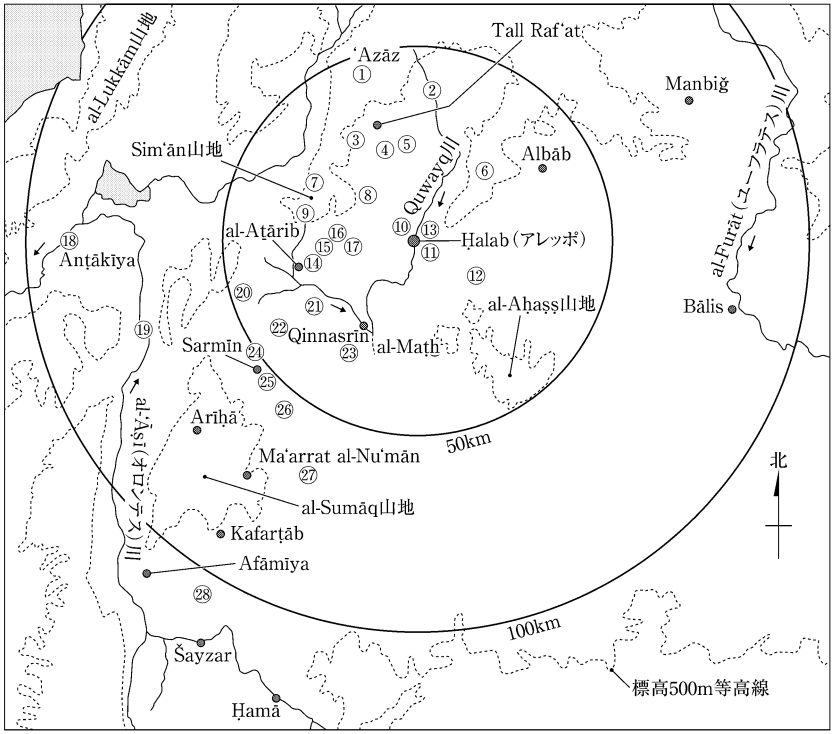

図1　アレッポにおけるワクフ財の分布――15世紀――（Cornu1985:plan I を基に作成）

近郊に存在するものが多い。川沿いに立地している製粉場［表4：学院12，21］は，水力を利用していたのであろう(9)。

ワクフ財のもう一つの中心は，アレッポ近郊から50km圏内にかけて分布する農地である。**図1**を見ればわかるように，50km圏外に分類された物件も，ほぼ半数は50km圏のすぐ外に位置している。これらを含めると，ワクフ財の大半がおおよそ50km圏内，すなわちアレッポ市街から1－2日行程の範囲内に存在したことになる(10)。また，その分布は都市アレッポの北から南西にかけ

(9)　「圧搾場」とはオリーブの実から油を取るための施設であろう。また，表4に示したとおり，「隊商宿」「製粉場」と訳した物件は，史料中ではそれぞれ2種類の原語が使い分けられているが，それらの違いを判別するだけの情報は得られなかった。

(10)　たとえば，580（1184）年にアレッポを訪れたIbn Ǧubayrは，アレッポ北東

て広がる丘陵地帯に大きく偏っている。この分布域は，古くからオリーブ栽培などが盛んな農業地帯に重なっており[11]，50km 圏内の農業生産がアレッポ市街の宗教施設を支えていたことを明瞭に示している。見方を変えると，都市アレッポを拠点とする農地経営に適した範囲は，おおよそ 50km 圏内であったとも言える。

この広がりと行政区域の関係を最後に確認しておこう。アレッポ市街の宗教施設を支えたワクフ財の分布は，先に示したアレッポ州の範囲に比べるとかなり狭く，その中央部から西部と南部に偏っている。ただし，明確に州外に位置する物件はダマスクス州の 3 件だけであり，大半がアレッポ州内に分布していたことがわかる ［**図 1**，**表 2**］。

第 2 章　設立と維持への関与

アレッポにおける宗教施設の設立にもっとも重要な役割を果たした人々は，12-15世紀を通じて支配者や軍人を中心とする支配層であった。しかしながら，マムルーク朝期には，学院以外の施設に関して支配層以外の人々による設立が増加し，件数としては過半数を占めるようになった［谷口 2005: 78］。それでは，宗教施設の設立・維持に寄与した人々とアレッポとの関係はどのようであったのだろうか。以下，2 節に分けて考察する。

第 1 節　設立者とアレッポとの関係

本節では，社会階層に加え，アレッポ地域との関係に注目しつつ12-15世紀を対象に宗教施設の設立者の傾向を考察する。分析対象とした設立者は，「谷口 2005」の表 A-1 ～ A-5 と本稿の**表 1** に挙げた設立者のうち，情報が乏し

35kmに位置する Albāb を夜に発って，翌朝午前中にアレッポに到達している［*Ibn Ǧubayr:* 250（日本語訳: 244）］。

⑾　Eddé1999: 491-495 にアイユーブ朝時代におけるアレッポ周辺の農業の状況が紹介されている。マムルーク朝時代も状況に大きな変化はなかったと思われる。ビザンツ帝国期の状況については，G. Tchalenko の研究に基づいた渡辺金一による詳しい紹介を参照されたい［渡辺 1980: 第 4 章］。

く分析不可能な人物を除く97名である。アレッポ地域との関係に注目して検討するために，「谷口 2005」とはやや異なる以下のような方針で分類し，稿末の**表 5** に掲げた。

まず「上位権力者」とは，シリア以外の地を本拠地としアレッポの支配者の上位に立つ権力を有する者で，名目的な宗主権者も含める。「アレッポの支配者」とは，アレッポ君主国の支配者に加えて，他地域を首都とする国家が派遣するアレッポ州総督を含む。他地域の総督を歴任した者でも，アレッポの総督に就任しなかった場合は，「支配者」ではなく「支配層」に分類した[12]。「アレッポの支配層（文官以外）」とは，アレッポ地域においてその支配者に仕えた軍人，廷臣および彼らの一族や解放奴隷など縁者を指す。「アレッポの文官」は，アレッポにおいてワズィール以下の行政職およびカーディー職に就いた人物である。以上の人物については，経歴欄にアレッポにおける職位などを記した。支配層に属す人物でアレッポ地域における軍事・政治的な立場が不明な場合は「支配層（アレッポにおける職位不明）」とした。設立者は区分ごとに時系列に沿って配列し，当該人物が設立した施設は，略号と番号の組み合わせによって施設欄に表示した。

以上のような**表 5** における分類に基づいて，時代と区分ごとに設立者の人数と設立件数を集計したものが**表 3** である。この表を見てまず気づくことは，いずれの時代をとっても，上位権力者による設立がきわめて少ないということである。この範疇にはアッバース朝カリフ，セルジュク朝スルターン，アイユーブ朝のカイロのスルターン等も含めて検討したが，設立者として史料中に現れるのはマムルーク朝スルターンの 3 件だけであった。12世紀初めからアイユーブ朝時代にかけて，上記の上位権力者たちがアレッポに対して名目的な宗主権しか保持していなかったことを，宗教施設の設立という点から裏付ける結果となっている。

上位権力者とは対照的に，全時代を通して設立者の半数以上を占めたのは，

---

⑫ 名目上の支配者に代わって実権を握っていた人物も「支配者」に含めた［表 5：2,15］。一方，Aydimur al-Ẓāhirī［表 5：27］は，アレッポ総督（wālī）という肩書きを持つが，アイユーブ朝アレッポ政権下の地位であるため「支配層」に分類した。

表 3　宗教施設設立者とアレッポとの関係――12-15世紀――

	ザンギー朝時代・以前		アイユーブ朝時代		マムルーク朝時代		合　計	
	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数
上位権力者	0	0	0	0	3	3	3	3
アレッポの支配者	4	17	2	5	13	17	19	39
アレッポの支配層（文官以外）	4	6	13	21	7	7	24	34
アレッポの文官	0	0	4	6	5	5	9	11
その他	1	1	3	5	11	11	15	17
アレッポ関係者小計	9	24	22	37	36	40	67	101
支配層（アレッポでの職位不明）	4	6	13	16	5	7	22	29
その他（アレッポとの関係不明）	0	0	1	1	4	4	5	5
関係不明者小計	4	6	14	17	9	11	27	34
合　計	13	30	36	54	48	54	97	138

アレッポの支配者や彼らに仕えた人物などアレッポに直接利害関係を持つと考えられる者たちである。特に，ザンギー朝時代以前とマムルーク朝時代は，人数で約７割以上，件数ではおおよそ3/4以上をアレッポ関係者による設立が占めていた。

ただし，支配層に属すがアレッポにおける職位が不明であるという設立者もかなりの数になる。特にアイユーブ朝時代は，そのような設立者が13名と目立つ。これらの中には有力者の解放奴隷やマウラーあるいはその息子という人物が合わせて４名おり［**表５**：32，34，36，37］，それとは別に女性が４名存在する［**表５**：38-41］。以上の８名は有力者の縁者ではあるが，どのような職位にあったかは不明であり，宗教施設設立の場としてアレッポを選んだ理由を考える材料に乏しい。

一方，**表５**の９，10（ザンギー朝時代），29，　30，　31（アイユーブ朝時代），74（マムルーク朝時代）の計６名は，他所に拠点やイクターをもつ有力者であり，アレッポにおける宗教施設の設立動機として直接的な政治的利害を考えにくい。以上のような事例は，宗教施設の設立動機が複合的なものであり，支配層にしても政治的な意図だけで宗教施設を設立するわけではないということを改めて

示していると言えよう[13]。

明確な利害関係が確認されないにもかかわらずアレッポに宗教施設を設立した者が支配層の中にかなり存在したことを考えると，情報不足による不正確さを考慮しても，マムルーク朝スルターンによる設立が3件のみというのは少ないように思える。スルターンによる設立の少なさと対照的に，マムルーク朝のアレッポ総督による設立は17件（13名）と際立って多い。

12-15世紀を通じて，アレッポにおける宗教施設の設立を担ったのは，社会階層にかかわらず主に現地と深い関係をもつ者であり，その傾向は，アレッポ地域が事実上の独立国であったアイユーブ朝時代においても，シリアとエジプトがカイロのスルターンの下で統一されたマムルーク朝の下でも，大きくは異ならなかったと言える。

第2節　アレッポ都市住民の関与

宗教施設について考える際には，前節のようにしばしば設立者の分析がなされる。しかしながら，あらゆる施設が一個人の力だけで設立されたとは限らず，小口の寄付などの形で無名の人々を含む複数の人物の協力が見られる場合もある。施設の維持や改修についても同様である。地域と施設の関わりをより具体的に考えるために，14世紀末から15世紀におこなわれた諸施設の設立や改修に関する記事の中から，このような人々の関わりが窺われる情報を抽出し，考察を試みることにする。

(1)　ルーミー・ジャーミィ　[表 A-1: 15]

769（1367）年に総督マンクリー・ブガー・シャムスィー［**表5**：57］が設立したルーミー・ジャーミィについては，KDの著者の父がここでムハッディスとして講じていたためか［KD 1: 245］，著者の同時代の状況が詳しく述べられている。15世紀半ば，このジャーミィの西壁に亀裂が広がり改修が必要になったが，管理者（mubāšir）たちはジャーミィの財産を自分たちの間で分配してし

[13]　宗教施設設立のさまざまな意図については，マドラサに限定してではあるが，岩武と三浦が論じている［岩武 1994: 248-252; 三浦 1995: 30, 33-34］。

まい，何一つ工事を行わなかった。852（1448）年，亀裂がさらに大きくなったため，街区民（ahl al-maḥalla）が総督タナム[14]をこのジャーミィに連れてくると，総督はその状況を見て同情した。

実はこれ以前に，アレッポ商人の代表格（ʻayn al-tuǧǧār）であったシハーブ・アッディーン・アフマド・マラティー[15]は，この修築について相談を受けていた。しかし彼は，この工事を口実に権力者（ḥukkām）の誰かが彼の財産の一部を取り上げかねないと心配し，まず総督に相談するよう勧めたのである。そこで彼らは，総督にジャーミィの収入（rayʻ）ではその修築費用を賄いきれないことを知らせた。すると総督は「私がその修築費用を寄付しよう」と言ったが，その一行は「いえ，我々は身を低くしてマラティーにその修築をおこなうようお願いします」と答え，総督から「おまえたちにとって都合がよいようにせよ」という言葉を得た。彼らがマラティーの許を訪れ以上のやりとりを伝えると，彼は500 iflūrī[16]をジャーミィの修築のために寄付した。さらにシフナ家のムヒッブ・アッディーン[17]が私財から拠出して漆喰を寄付した。総督はカイロへ使者を送って職人を招き，852年１月19日（1448年3月25日）に修築を開始して約３ヶ月後に終了した［KD 1: 243-244］。

西壁の改修から20年経った873（1468/69）年，今度は北壁とその下の地下室に亀裂が入り，翌年にはその亀裂が大きくなり修築が必要となった。そしてマラティーの寄付金が底をつくと，ハーッジュ・ムハンマド・ブン・サファー（al-ḥāǧǧ Muḥammad b. Ṣafā）が全額を寄付し改修したのである[18]。

---

⑭ Tanam，al-Mu'ayyadī Sayf al-Dīn．851年９月４日―852年６月中旬（1447年11月13日―1448年８月中旬），アレッポ総督在任［KD 2: 205, 213］。868（1493）年，ダマスクスで没［DL 3：44］。

⑮ al-ḫawāǧā Šihāb al-Dīn Aḥmad al-Malaṭī．この人物は，アレッポに孤児の教室を設立している［表 A-４：17］。

⑯ Sauvaget の訳に従い，マムルーク朝内でも流通したというフィレンツェの fiorino 金貨あるいはそれに準ずる貨幣のことと解する［*Trésors:* 42］。

⑰ 原文には Ibn al- Šiḥna Muḥibb al-Dīn とあるだけであるが，マムルーク朝時代にハナフィー派のカーディーを輩出したシフナ家の Abū al-Faḍl Muḥammad（890［1485］年没）と思われる［太田 1990: 91-92］。

⑱ KD 1: 244．この人物は，善行者（raǧul ḫayr）と評され，このジャーミィに敷物も寄付している［KD 1: 245］。

以上がルーミー・ジャーミィの２度にわたる修築経緯の概要である。最初の西壁の修復に際して語られている商人マラティーの危惧と総督との交渉の関係がややわかりにくいが，改修工事に対して総督から直々のお墨付きを得ることで，その下僚からの介入を防ぐための根回しであったと思われる。いずれにせよ，ワクフ収益による修築が不可能になると，街区の住民が立ち上がり，大商人や有力ウラマーから寄付を集める一方で総督にも働きかけていることがわかる。

（2） バーナクーサーの新ジャーミィ ［表 A-1：21］

バーナクーサーの新ジャーミィは，788年８月（1386年８/９月）にアレッポ総督スードゥーン・ムザッファリー［**表５**：60］が設立した［IMA: 353］。その後，ハスバク・ハワージャー（Ḫaṣbak[19] al-ḫawāǧā）なる人物が増改築（‘ammara）に着手したが完成できず，善行の徒（ahl al-ḫayr）が完成した。彼らは光塔を建築し，中庭を黄色大理石で舗装したという［KD 1: 265］。

以上の経緯の記述は伝聞であることが示されており，スィブト・イブン・アルアジャミーよりも前の世代に属する出来事と思われる。したがって，一連の増改築はおおよそ14世紀末から15世紀第１四半世紀の間におこなわれたとみられる。このジャーミィを増改築しようとした人物は，al-ḫawāǧā という称号からみて裕福な商人と考えてよかろう[20]。また，彼の事業が未完成に終わった理由は示されていないが，資金不足が理由の一つであったと思われる。というのも，スィブト・イブン・アルアジャミーは，この逸話を紹介したあとに「このジャーミィのワクフは貧弱であるが，その必要を十分に満たす者（man yaqūmu bi-kifāyati-hi）を神が与え給う」と述べているからである［KD 1: 265］。善行の徒と呼ばれる人々などが資金を補い工事を完成させたのであろう。

⑶ ナイラブ門外のタウバ・ジャーミィ［表 A-1：27］

アレッポでは15世紀に Tawba（悔悟）という名を持つジャーミィが二つ設立

⑲ この部分の正確な読みは不詳。

⑳ al-ḫawāǧā という称号がマムルーク朝時代の有力商人に用いられたことについては，「佐藤 2004」の148頁を参照せよ。

された。そのうちの一つであるナイラブ門外のタウバ・ジャーミィの設立経緯の概要は以下のとおりである。このジャーミィが位置するナイラブ門外の一地区は，スーダーン地区（Ḥārat al-Sūdān）と呼ばれ，酒が販売され歌姫たち（qaynāt）が居るという場所であった。禁欲主義者イブン・アルマァサラーニー[21]は，そこにジャーミィを建設しようとし，総督タナムに対しスーダーン地区の状況を厳しく非難した。851（1447/48）年，彼はジャーミィを設立したが，竣工したのはその没後であった。このジャーミィ建設に対してアミール=アサルマース・トルクマーニー[22]などが大金を出したほか，「善行の徒が自分の財貨や自分たち自身〔の労働を提供すること〕で協力」し，そこには光塔が建てられ地面は大理石で舗装された。また善行の徒がこのジャーミィに対して複数のワクフを設定した[23]。

⑷　ウバイス・ジャーミィ［表 - 1 : 30］

マカーム門北側の街区に存在し，現在ではビザ・ジャーミィ（Ǧāmiʻ Biza）と呼ばれる。スィブト・イブン・アルアジャミーの同時代に，古いマスジドに光塔を新設するなどの改築を施し，金曜礼拝が行われるようになった。その改築には善行の徒が協力した［KD 1: 249］。

⑸ バーフスィーター・ジャーミィ［表 A - 1 : 43］

現在ではスィーター・ジャーミィー（Ǧāmiʻ Sītā）として知られるが，AH にはバーフスィーター・マスジド（Masǧid Bāḥsītā）と記されており，13世紀半ば以前にマスジドとして設立されていたことがわかる［AH: 67］。その後，14世紀末ないしは15世紀前半に[24]，このマスジドに隣接した家に住んでいたアラ

⑵1 Šams al-Dīn Muḥammad b. Abī Bakr Ibn al-Maʻsarānī al-Ǧibrīnī. アレッポの墓廟や学院に滞在し禁欲主義的生活を送ったウラマー。852年 3 月20日（1448年 5 月24日）に没し，彼が設立したジャーミィの隣に葬られた［KD 2: 211-212］。

⑵2 Asalmās al-Turkumānī. 名前の前半の正確な読みは不明。Sauvaget の読みに従う［*Trésors*: 46］。この人物については，この事例以外の情報を確認できなかった。下位の軍人であったかと思われる。

⑵3 経緯の概要および直接引用部分は，KD 1: 248-249 に拠る。ジャーミィの設立年は，IN 5: 238 に引用されている碑文に拠った。

⑵4 本文中に示した経緯は，マスジド拡張の当事者であるアラム・アッディーンの息子が KD の著者に直接伝えた情報なので，後者の 1 世代前の出来事であると推定した。

ム・アッディーン（al-qāḍī ʻAlam al-Dīn）とシャムス·アッディーン（al-šayḫ Šams al-Dīn al-kātib)の兄弟が家を明け渡してマスジドを拡張したものの荒廃してしまった。それを，ハーッジュ・アリー・サイバク[25]という宝石商が再建したのである。スィブト・イブン・アルアジャミーの同時代には，街区の善行の徒（ahl al-maḥalla min ahl al-ḫayr）がさらに拡張し，何人かの商人たちが彼らに協力した［KD 1: 262-263］。

(6) ハッダーディーヤ学院 ［表 A-2：15］

ハッダーディーヤ学院は，12世紀後半に設立されたハナフィー派のマドラサであったが，803（1400）年のティムール侵攻後に活動を停止し，女たちの住処になっていた。そこへアラー・アッディーン・ジブリーニー[26]という禁欲主義者（zāhid）がやって来て，女性たちを追い出し，再整備し水を引いた。そして部屋の一つを自分用にして，そこで信仰三昧の生活を送るようになった。このジブリーニーによる再建の過程で，ある善行の徒が黒い水盤（ǧurn）を提供した。またある人々（baʻḍ al-nās）は，水槽（ṣahrīǧ）を設置し経費を全て出した。そして，このマドラサではズィクルと５度の礼拝がおこなわれるようになり，２人のムアッズィンが置かれ，敷物と照明が整備された［KD 1: 350］。

15世紀のアレッポ市街において，無名の民衆が宗教施設に何らかの貢献をしたことがわかる記事は，管見の限りでは以上の６件である。限られた情報ではあるが，これらの記述に基づいて考えてみたい。まず，施設の設立や維持に貢献した「善行の徒」とはどのような人々だったのだろうか。事例(5)に見られるように，街区と結びつけて語られることもあるので，これらの人々は基本的に都市アレッポの住民であると考えてよかろう。寄付やワクフを設定する者がいた一方で，労働を提供するという貢献の仕方も見られ，財政的に余裕のある住民ばかりであったとは限らない。

---

(25) al-ḥāǧǧ ʻAlī al-Saybak. al-Saybak とした部分の正確な読みは不明である。Sauvaget の読みに従う［*Trésors*: 55］。

(26) ʻAlāʼ al-Dīn Yūsuf al-Ǧibrīnī. なお，KD のテキストではニスバが al-Ǧabartī と読める箇所もある。

商人の貢献も目立つ。マムルーク朝時代には，宗教施設を設立する商人が増加した[27]。しかしながら，商人たちはその富を施設の設立に注ぎ込んだだけではなかった。事例(1)(2)(5)に見えるように，施設の増改築や改修，再建に対しても商人たちは重要な役割を果たしたのである。また，(3)の1件だけであるが，善行の徒と並んでアミールが資金を提供している例も見られる。このように，一つの宗教施設の設立や維持に対しても，さまざまな社会階層の者が関与していたのである。

住民の関与が見られた施設の種別に注目すると，(6)を除く5件がすべてジャーミィに関する記事であることに気づく。この偏りは，ムスリム住民にとって自分たちの街区にあるジャーミィの維持が重要事項の一つであったということの現れであろう。(1)と(5)の記述からは，住民が自分たちの街区にあるジャーミィの改修や拡張に取り組んでいる様子が窺われる。また，ムスリム共通の礼拝の場であるジャーミィは，特定の法学派やタリーカだけを対象とした学院や修道場に比べて，より多くの人々に善行の対象とされたと思われる。

人々を「善行」へと駆り立てるもう一つの要素は，精力的な宗教家の活動である。イスラームの立場からすれば非合法な商売がおこなわれていた地区にあえてジャーミィを建てようとしたイブン・アルマァサラーニーに対して，人々（al-nās）はその意図の純粋さを認めて彼を支持したという［KD 1: 248］。また，ハッダーディーヤ学院を再建したアラー・アッディーンは，他に2件の施設を再建した[28]。

最後に，以上の6件の事例に関して，カイロのスルターンの関与がほとんど見られないことにも注目しておきたい。事例(1)にあるように，アレッポの住民が街区のジャーミィの惨状を訴える相手は総督であって，カイロのスルター

(27) アイユーブ朝時代以前の設立者で商人であることがはっきりしているのは，Ibn Rawāḥa というダマスクスの有力商人だけである［表5：49］。それに対して，マムルーク朝下のアレッポに宗教施設を設立した商人は5名を数える［表5：91, 93, 95-97］。

(28) al-Madrasa al-Ṣāḥibīya と Ḫānqāh al-Ballāṭ［KD 1: 293-294, 388］。さらに，Argūn al-Nāṣirī の墓廟の整備を手がけた al-Ǧabartī も同一人物と思われる［KD 1: 429］。

ンに関与を求めることはほとんどなかったと考えられる[29]。

第3章　ダマスクスおよびエルサレムとの比較

以上2章にわたって述べてきたアレッポの宗教施設に関するワクフ財と設立者の傾向について，アレッポと並ぶシリアの重要都市であるダマスクスおよびエルサレムと比較してみたい。幸い両都市に関しては三浦徹の詳細な研究があるので，以下その研究を参照しながら比較を試みることにする。まず，ダマスクスの学院については，「三浦 1995」の稿末にマムルーク朝末期までに設立された施設の一覧表が付されている。この表に掲げられた152件のうち上位権力者による設立と言えるものは，アイユーブ朝のサラーフ・アッディーンがウマイヤ・モスク内に設立したマーリク派の講座（al-Zāwiya al-Mālikīya），その息子のスルターン=アズィーズ・ウスマーンが設立したアズィーズィーヤ学院（al-Madrasa al-ʻAzīzīya），マムルーク朝のスルターン=サイード・バラカが父バイバルス1世の墓廟を兼ねて建てた市内のザーヒリーヤ学院（al-Madrasa al-Ẓāhirīya）の3件のみのようである。また，軍人層の設立者の多くは，総督などとしてダマスクスに赴任した者であるという[30]。

ジャーミィについては利用できる研究がないので，16世紀初頭までのダマスクスにおける宗教施設の情報をまとめた *Dāris* の記述に基づいて考えることにする。同書のジャーミィに関する章［*Dāris* 2: 371-445］にはマムルーク朝時代

---

(29) ただし事例(3)に関連して，スーダーン地区における不法行為についてIbn al-Maʻsarānī が総督を非難した後，不法行為を停止せよという命令書がカイロのスルターンから届き，彼の力（qadr）が強まったという記事がある［KD 2: 211］。ここに，アレッポにおける論争へのスルターンの関与が見られるが，Ibn al-Maʻsarānī が直接スルターンに訴えたのか，あるいは総督が判断を仰いだのかという点については判然としない。

(30) 三浦 1995: 34, 48-53（表2）。ただし，サラーフ・アッディーン自身が設立したわけではないが，彼に因んだ名称を持つようになった学院が存在する。たとえば，ザンギー朝の al-Malik al-Ṣāliḥ Ismāʻīl が建設した al-Madrasa al-ʻImādīya は，サラーフ・アッディーンがワクフを設定しており，al-Ṣalāḥīya という名称が追加されている［AH（D）: 237］。他に，ヌール・アッディーンが設立したとされているにもかかわらず al-Ṣalāḥīya と呼ばれている学院が表中に2件見える。ワクフの追加や改修などの形でサラーフ・アッディーンが関与したのであろう。

末までに設立された31件のジャーミィが挙げられているが，そのうち上位権力者が設立したジャーミィとしては，ウマイヤ・モスクの他にはアイユーブ朝のアーディル１世が606（1209/10）年に設立したムサッラー・ジャーミィ（Ǧāmiʿ al-Muṣallā）が見られるのみで［*Dāris* 2: 419］，マムルーク朝のスルターンたちはダマスクスにジャーミィを設立していない。他方，ダマスクスの支配者（総督）が設立したジャーミィは７件で，そのうちマムルーク朝のダマスクス総督によるものは３件である[31]。つまり，シリア第一の都市であるダマスクスにおいても，上位権力者よりも現地の支配者（総督）の方がジャーミィと学院の設立に大きく貢献していたことがわかる。

また，ワクフ財についてみると，ダマスクスの学院を支えたワクフ財はレバノンやアレッポといった遠隔地にも存在したが，その多くはダマスクス近郊の農地か市街にある商業施設や家屋，製粉場であった［三浦 1995: 35］。以上の検討によってすべての種類について比較できたわけではないが，ダマスクスにおける宗教施設の設立者とワクフ財の傾向は，おおむねアレッポと類似していると考えられよう。

エルサレムにおける設立者の傾向は，この２都市とはかなり異なっている。アイユーブ朝とマムルーク朝の支配期に設立された80件の各種宗教施設のうち，エルサレムの支配者（総督）による設立は２件のみで，同じパレスチナ内ではあるが約80km離れたガザの総督を含めても，現地の支配者による設立は４件にとどまる。これに対して，アイユーブ朝のサラーフ・アッディーンは４件を設立し，マムルーク朝のスルターンではカラーウーンとカーイトバイがそれぞれ１件を設立しており，スルターンによる設立数は６件に及ぶ。また，アイ

(31) ザンギー朝時代では，ヌール・アッディーンが565（1169/70）年にǦāmiʿ Dāryā al-Kubrāを再建し，さらに設立年は不詳だがǦāmiʿ Qalʿat Dimašqを設立した［*Dāris* 2: 431-432, 442］。アイユーブ朝では，ダマスクス政権君主アシュラフ・ムーサーが荒廃したマスジドを改築して631（1233/34）年にǦāmiʿ Ǧarrāḥを設立し，その翌年にǦāmiʿ al-Tawbaを設立した［*Dāris* 2: 420, 426］。マムルーク朝のダマスクス総督が設立したジャーミィは，ジャマール・アッディーン・アフラムが設立し706（1307）年に竣工したǦāmiʿ al-Aframl［*Dāris* 2: 435］，タンキズが設立し718（1318）年に完成したǦāmiʿ Tankiz［*Dāris* 2: 425-426］，ヤルブガー・サイフィーが747（1346/47）年に設立したǦāmiʿ Yalbuġā［*Dāris* 2: 423］の３件である。

ユーブ朝のダマスクス政権君主ならびにマムルーク朝ダマスクス総督の設立によるものがそれぞれ4件ずつ計8件ある[32]。彼らもエルサレムにとっては，スルターンに次ぐ上位権力者か他地域の支配者であったと考えてよかろう。マムルーク朝時代のエルサレムはダマスクス総督の管轄下に置かれており両者は比較的関係が深いとはいえ［三浦 2004: 135］，直線距離で200km以上も離れているのである。

さらにエルサレムに特徴的なことは，オスマン家の女性やイランの地方政権君主といった遠隔の地の人物が設立者の中に見られるという点である。現地に直接の利害をもつ人物よりも，むしろ遠隔地の有力者が多くの施設をエルサレムに設立した要因は，三浦が指摘するように，ムスリムにとってメッカとメディナに次ぐ聖地であるというエルサレムの特別な地位にあったと言える［三浦 2005: 142］。

ではワクフ財についてはどうか。オスマン朝時代初期のワクフ調査記録を検討した三浦によると，エルサレムのワクフ財も市内や近郊に存在するものが多く，農村からの収入が大きかったという［三浦 2005: 160］。つまり，遠隔地の設立者を惹きつけたエルサレムの諸施設も，主としてその都市を中心とする地域内の農業生産や経済活動に基づくワクフ収益によって運営されていたという点では，アレッポやダマスクスと同様なのである。

この共通点の理由の一つとして考えられるのは，3都市が位置するシリアの自然環境である。降水量が少なく大河が存在しないシリアでは，比較的まばらな農村地帯の中に中小都市が散在し，またナイル川のような大河による水運が利用できない。このような状況下では，ワクフ財の物件は受益施設が存在する都市からあまり遠くない場所に求めるのが管理や輸送の面で理にかなっていたと言える[33]。

---

(32) 以上の数字は，「三浦 2004」所収の表2［138-140頁］から集計した。

(33) ナイル河口部のダミエッタにあるal-Madrasa al-Ašrafīyaへは，600km以上も上流にある農地からの収穫物がナイル川を利用して運搬されていた［長谷部 2004:74-75］。

お わ り に

マムルーク朝時代後期の15世紀，アレッポ市街に存在したイスラーム宗教諸施設を財政的に支えていたのは，主として市街地の商工業施設や50km圏内の農地であり，ワクフ財の分布域はアレッポ州内にほぼ限定されていた。一方，施設の設立や維持に中心的な役割を果たしたのは，この地に赴任した総督やアレッポ市街の住民たちという地域に直接利害関係のある人々であり，カイロのスルターンの関与は例外的であった。このような傾向はダマスクスでも同様であったが，聖地エルサレムは，現地に直接の利害関係を持たない設立者を多く惹きつけた点で異なっていた。

マムルーク朝時代のエルサレムは，政治的には重要性を失っていたとされる［三浦 2004: 135］。そのエルサレムに外部の権力者たちによる宗教施設の設立が集中する一方で，政治・行政の面ではるかに重要なアレッポとダマスクスにおいては，マムルーク朝スルターンによる宗教施設の設立はほとんど見られなかった。

この事実は，スルターンが首都以外の地に宗教施設を設立する場合は，政治的効果よりも宗教的な動機を重視していたということを示しているのであろうか。そもそも全国規模の政策という観点から宗教施設の設立を進める君主が例外的な存在で，それは中央集権化が進んだとされるマムルーク朝においても同様であったということか[34]。この疑問に対する答えを探るためにも，地方における上位権力者の宗教施設への関与について，アレッポ以外の地域も含めてさらに検討する必要があろう。

---

(34) 王朝草創期や領土拡張期の君主には，支配領域各地に宗教施設を設立する例がしばしば見られる。シリア統一を進めたヌール・アッディーンは，中小都市にもマドラサを設立した［Elisséeff 1967, 3: 914-935（annexe II-VI）］。また，マムルーク朝国家の礎を築いたバイバルス１世は各地にジャーミィを設立したが，その多くは十字軍勢力やイスマーイール派から奪った地に設けられた［TMZ: 347, 348, 352-360］。

史料及び略号

Abū Šāma, Muḥammad. Šihāb al-Dīn ʻAbd al-Raḥmān. *al-Rawḍatayn fī aḫbār al-dawlatayn.* Ed. by M. Ḥ. M. Aḥmad. Vol. 1, part 1-2. 1956-1962, Cairo. [RD]

———. *Tarāǧim riǧāl al-qarnayn al-sādis wa al-sābiʻ.* (*al-Ḏayl ʻalā al-Rawḍatayn.*) Ed. by M. Z. al-Kawārī. 1947. Reprint, Beirut, 1974. [dRD]

al-Ḥamawī, Yāqūt. *Muʻǧam al-buldān.* Ed. by F. Wüstenfeld. 6vols. Leipzig, 1866-1870. Reprint, Tehran, 1965. [MB]

Ibn al-ʻAdīm, Kamāl al-Dīn ʻUmar. *Buġyat al-ṭalab fī tārīḫ Ḥalab.* Ed. by S. Zakkār. 10vols. ＋ index. Damascus, 1988. [BT]

———. *Zubdat al-Ḥalab fī tārīḫ Ḥalab.* Ed. by S. al-Dahhān. 3 vols. Damascus, 1951-1968. [ZH]

Ibn Ǧubayr, Muḥammad b. Aḥmad. *Riḥlat Ibn Ǧubayr.* (*Taḏkira bi-l-aḫbār ʻan ittifāqāt al-asfār.*) Ed. by William Wright. Leiden, 1852. 2d ed., rev. by M. J. de Goeje, 1907. Reprint, Frankfurt am Main: Institute for History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1994. [*Ibn Ǧubayr*]（日本語訳：藤本勝次，池田修（監訳）『旅行記』関西大学出版部，1991).

Ibn Ḥaǧar, Šihāb al-Dīn Aḥmad al-ʻAsqalānī. *al-Durar al-kāmina fī aʻyān al-miʼa al-ṯāmina.* 4vols. Hayderabad, 1930-1931. Reprint, Beirut, n. d. [*Durar*]

Ibn Ḫallikān, Šams al-Dīn Aḥmad. *Wafayāt al-aʻyān wa anbāʼ abnāʼ al-zamān.* Ed. by I. ʻAbbās. 7vols. ＋ index. Beirut, 1972. [WA]

Ibn Qāḍī Šuḥba, Taqī al-Dīn Abū Bakr. *Tārīḫ Ibn Qāḍī Šuhba.* Ed. by ʻA. Darwīš. 4vols. Damascus, 1977-1997. [*Šuhba*]

Ibn Šaddād, ʻIzz al-Dīn Muḥammad. *al-Aʻlāq al-ḫaṭīra fī ḏikr umarāʼ al-Šām wa al-Ǧazīra.* (*Tārīḫ Ḥalab.*) Ed. by D. Sourdel. Damascus, 1953. [AH (H)]
(*Tārīḫ Dimašq.*) Ed. by S. al-Dahhān. Damascus, 1956. [AH (D)]

———. Tārīḫ al-Malik al-Ẓāhir. Ed. by A. Ḥuṭayṭ. Wiesbaden, 1983. [TMZ]

Ibn al-Šiḥna, Muḥammad. *Tārīḫ Ḥalab* (*The History of Aleppo: Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shiḥna*). Ed. by K. Ohta. Tokyo, 1990. [Sih]

Ibn Taġrībirdī, Ǧamāl al-Dīn Yūsuf. *al-Manhal al-ṣāfī wa al-mustawfī baʻd al-wāfī.* Ed. by M. M. Amīn et al. 11vols., in progress. Cairo, 1984-continuing. [*Manhal*]

———. *Nuǧūm al-zāhira fī mulūk Miṣr wa al-Qāhira.* Ed. by F. M. Šaltūt et al. 16vols. Cairo, 1929-1972. [*Nuǧūm*]

Ibn al-Wardī, Zayn al-Dīn ʻUmar. *Tārīḫ Ibn al-Wardī.* 2vols. Najaf, 1969. [*Wardī*]

al-Nuʻaymī, ʻAbd al-Qādir b. Muḥammad. *al-Dāris fī tārīḫ al-madāris.* Ed. by Ǧaʻfar al-Ḥasanī. 2vols. Damascus, 1948-1951. [*Dāris*]

al-Qalqašandī, Aḥmad b. ʻAlī. *Ṣubḥ al-aʻšā fī ṣināʻat al-inšāʼ.* 14vols. Cairo, 1913-1920. Reprint, Cairo, [1963]. [*Ṣubḥ*]

al-Saḫāwī, Šams al-Dīn Muḥammad. *al-Ḍaw' al-lāmi' li-ahl al-qarn al-tāsi'*. 12vols. Cairo, 1353-1355(1934-1936). Reprint, Beirut, n. d. [DL]

Sibṭ Ibn al-'Aǧamī, Aḥmad b. Ibrāhīm. *Kunūz al-ḏahab fī tārīḫ Ḥalab*. Ed. by Š. Ša'ṯ & F. al-Bakkūr. 2vols. Aleppo, 1996. [KD]（フランス語抄訳: Trans. by Jean Sauvaget, *"Les trésors d'or" de Sibṭ Ibn al-'Ajami*. Beirut, 1950. [*Trésors*]）

al-Ṭabbāḫ, Muḥammad Rāġib. *I'lām al-nubalā' bi-tārīḫ Ḥalab al-Šahbā'*. 7 vols. + index. 1923. 2nd ed. Aleppo, 1988-1992. [IN]

Répertoire chronologique d'épigraphie arabe. Ed. by Étienne Combe et al. 18vols., in progress. Cairo, 1931-continuing. [RCEA]

Herzfeld, Ernst. *Inscriptions et monuments d'Alep*, vol. 2. Cairo, 1956. [IMA]

研　究

阿久津正幸（1999a）「ザンギー朝アレッポのマドラサ建設」『イスラム世界』第53号，1-25頁.

———（1999b）「中世イスラム世界における教育施設マドラサの政治的機能の再検討」『史学』第69巻第１号，141-158頁.

岩武昭男（1994）「公益・福祉制度—ワクフ」後藤明（編）『文明としてのイスラーム』栄光教育文化研究所，219-256頁.

太田敬子（1990）「Ibn ash-Shiḥnaのアレッポ史についての研究」『オリエント』第32巻第2号，90-102頁.

大稔哲也（1988）「ザンギー朝の統治と行政官」『東洋学報』第69巻第３・４号，31-82頁.

菊池忠純（1992）「マムルーク朝時代のカイロのマンスール病院について」藤本勝次，加藤一朗両先生古稀記念会編『中近東文化史論叢』関西大学文学部史学地理学科合同研究室，47-67頁.

佐藤次高（2004）「マムルーク朝時代の奴隷商人とカーリミー商人」『史滴』第26号，132-150(01-19)頁.

谷口淳一（1996）「11-13世紀のハラブにおけるウラマー三家系」『史林』第79巻第１号，61-94頁.

———（1998）「ハラブ史の中のライース達」『西南アジア研究』第49号，34-52頁.

———（2005）「12-15世紀アレッポのイスラーム宗教施設」『西南アジア研究』第62号，66-98頁.

長谷部史彦（2004）「中世エジプト都市の救貧」長谷部史彦（編著）『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会，45-89頁.

三浦徹（1995）「ダマスクスのマドラサとワクフ」『上智アジア学』第13号，21-62頁.

———（2004）「中世エルサレムにおける救貧」長谷部史彦（編著）『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会，127-181頁.

湯川武（1980）「6/12世紀のシリアにおけるマドラサの発展」『史学』第50号，343-365頁.

渡辺金一（1980）『中世ローマ帝国』岩波書店.

‘Abd al-Ḥāfiẓ,Ḥamza, ‘Ādil（2000）. *Niyābat Ḥalab fī ‘aṣr Salāṭīn al-Mamālīk,* 2vols. Cairo.

Bosworth, Clifford Edmund（1996）. *The New Islamic Dynasties*. Edinburgh.

Cornu, Georgette（1985）. *Atlas du monde arabo-islamique à l'époque classique*. Leiden.

Dussaud, René（1927）. *Topographie historique de la Syrie antique et médiévale*. Paris.

Eddé, Anne-Marie（1991）. "Une grande famille de shafiites alépins," *Revue du Monde Musulman et de Méditerranée,* 62, pp. 61-71.

———（1999）. *La principauté ayyoubide d'Alep*. Stuttgart.

Elisséeff, Nikita（1967）. *Nūr ad-Dīn,* 3vols. Damascus.

Encyclopaedia of Islam, New ed. Leiden, 1954-continuing. [EI^2]

Humphreys, R. Stephen（1977）. *From Saladin to the Mongols*. Albany.

Martel-Thoumian, Bernadette（1992）. *Les civils et l'administration dans l'État militaire mamlūk*. Damascus.

表 4　アレッポにおけるワクフ財—15世紀—

No.	受益施設	ワクフ財			
ジャーミィ（表A-1）		所在地	位置区分	種　類	典　拠
8	Mihmandār	al-*smwqT* 村（Tall Raf‘at 近郊）	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 258 (n. 2)
		‘Azāz ①	50km内	浴場［一部分］	KD 1: 258
		受益施設の正面	市街	家屋（bayt）	KD 1: 258
11	Ṣafī	Darkūš〈Darkoush〉⑲	100km内	果樹園	KD 1: 262
15	Rūmī	Ǧāmi‘ bi-l-Dabbāġa 近隣［Ḫān li-l-Daqqāqīn］	市街	隊商宿（ḫān）［一部分］	KD 1: 260
		Qinnasrīn 門近辺	市街	浴場［一部分］	KD 1: 260
20	Nāṣirī 1	内城周辺	市街	浴場	KD 1: 252-253
22	Mawāzīnī	Ma‘arrat ‘Ulyā〈Ma‘arat ‘Ouliya〉㉕	100km内	農地？	KD 1: 240
45	‘Alī	［Maṣbanat al-*ǧzryT*］	市街？	石鹸工場（maṣbana）［2/3］	KD 1: 260
48	Sulṭān	受益施設の周辺	市街	農地？（arāḍī）［複数］	KD 1: 262
学院（表A-2）		所在地	位置区分	種類	典　拠
8	Niffarīya	Tall Bāǧir〈Tell Badjer〉㉓	50km内	農地？	KD 1: 287
9	Asadīya 1	ダマスクス	ダマスクス州	不詳	KD 1: 303
		sArd 村	アレッポ州	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 303
		Bānaqūsā ⑬の外	近郊	店舗［複数］	KD 1: 303-304
10	‘Aṣrūnīya	アレッポ	市街？	市場［1/2］	KD 1: 279
12	Muqaddamīya	Quwayq 川沿南郊［Raḥā al-Ǧawharī］	近郊	製粉場（raḥā）	KD 1: 353
		Kaftān〈Keftin〉村⑳	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 353
13	Ǧāwulīya	Tiftināz〈Teftenaz〉㉒	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 354
14	Ṭumānīya	al-Kallāsa付近［Bustān al-*ǧwrT*］	近郊	果樹園	KD 1: 355
15	Ḥaddādīya	Sūq al-Ḥarīr	市街？	店舗［複数］	KD 1: 351
20	Ǧurdīkīya	Kafar Nūrān〈Kefer Nouran〉㉑	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 352
21	Ǧubayl	Quwayq 川沿南郊［Ṭāḥūn al-*dwyr*］	近郊	製粉場（ṭāḥūn）［1/6］	KD 1: 332-333
		Quwayq 川沿南郊？［Raḥā al-Muḥdaṯa］	近郊？	製粉場（raḥā）［一部分］	KD 1: 333
		Sūq al-Hawā［’］(1)	市街	店舗［複数］	KD 1: 333
		Suwayqat Ḥātim	市街	店舗［複数］	KD 1: 333
26	Ṣāḥibīya	Kafar *slwAn*（‘Azāz 域内）	50km内	農地？	KD 1: 294
		al-Ḥabbālīnの南(2)	市街？	市場	KD 1: 294

27	Bahā' al-Dīn Ibn Šaddād	*krmAyl* 村(‘Azāz 域内)	50km内	農地？	KD 1: 378
28	Ẓāhirīya	受益施設に隣接	近郊	果樹園	KD 1: 318
		[Sūq al-Ẓāhir]	市街	市場[1/2]	KD 1: 318-319
		‘Ayn *ArzT*(Albāb 域内)	50km内	農地(ḍay‘a)[大部分]	KD 1: 319
29	Ḥusāmīya	*bqrḍwnA* 村	不詳	農地(ḥiṣṣa)	Sih: 113-114
		Bayt Ra's 村	アレッポ州	農地(ḥiṣṣa)	MB 1: 776; Sih: 113-114
30	Sayfīya 2	*slAmyn* 村(Sarmīn 域内)	100km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 317
		al-*mAlkyT* 村(‘Azāz 域内)	50km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 317
		tybsAr 村	不詳	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 317
32	Šarafīya	al-*qršyT*(Bālis への道沿い)	100km内	農地？	KD 1: 314
		Ḥirbīl 〈Tashli Ḥirbil〉村⑤	50km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 314(n. 3)
		dyd 村	不詳	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 314
33	Ẓāhirīya Sulṭānīya	‘Ayn *dqnA*(‘Azāz域内)	50km内	農地？	KD 1: 300
		qmry(3)	50km内	農地？	KD 1: 300(n. 3)
		al-*qysyT*	不詳	農地？	KD 1: 300
		Aṣb‘A	不詳	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 301
		nbl(Tall Raf‘at 近郊)	50km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 301(n. 1)
		ḥrbtA	不詳	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 301
36	Rawāḥīya	Tall A‘ran〈Tell ‘Aran〉村⑫	50km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 306(n. 2)
		*nfyḥyn*村	不詳	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 306-307
		*mšqAtyn*村(4)	50km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 307(n. 1)
41	Firdaws	Kafar Zaytā〈Kefr Zeita〉㉘(5)	100km外	農地(ḍay‘a)	KD 1: 323
		Kafar Zaytā〈Kefr Zeita〉㉘	100km外	製粉場(ṭāḥūn)[2/3]	KD 1: 323
43	Ǧamālīya	Bānaqūsā [Ḥammām al-‘Atīq]⑬(6)	近郊	浴場[3/4]	KD 1: 367; Sih: 117
		al-Nayrab⑪	近郊	農地[4f.]	Sih: 117
		Dābiq〈Dabiq〉②	50km内	農地[4f.]	Sih: 117
45	Bulduqīya 2	Kafar Zaytā〈Kefr Zeita〉㉘(7)	100km外	製粉場(ṭāḥūn)[1/3]	KD 1: 331
48	Fuṭaysīya	Dayr al-Ǧamāl〈Deir el-Djemal〉③(8)	50km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 357
57	Ṣalāḥīya	al-Ǧinān 門外	近郊	隊商宿(ḫān)[2]	KD 1: 337
		al-Ǧinān 門外	近郊	店舗[複数]	KD 1: 337

57	Ṣalāḥīya（続き）	*kfrh*（‘Azāz 域内）	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 337（n. 2）
		snAǧr	不詳	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 337
		snAǧr	不詳	製粉場（ṭāḥūn）	KD 1: 337
		al-*bryǧ* 村（Albāb 域内）	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 337
		‘Anadān〈‘Anadan〉村⑧	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 337
61	Ašiqtimurīya	受益施設の近隣	市街	浴場	KD 1: 369; Sih: 228
		受益施設の近隣	市街	パン焼き竈（furn）	Sih: 228
		受益施設の近隣	市街	隊商宿（ḫān）	Sih: 228
		受益施設の近隣	市街	圧搾場（mi‘ṣara）	Sih: 228
		受益施設の近隣	市街	店舗［複数］	Sih: 228
65	Kaltāwīya	Bānaqūsā⑬	近郊	圧搾場（mi‘ṣara）	KD 1: 369
		受益施設の近隣	市街	邸宅（dār）	Sih: 228
		受益施設の近隣	市街	厩［複数］（isṭablāt）	Sih: 228
		受益施設の近隣	市街	店舗［複数］	Sih: 228
71	Nāṣir al-Dīn 2	アレッポ	アレッポ州	不詳	KD 1: 441

修道場（表A-3）		所在地	位置区分	種類	典 拠
4	Qadīm	*bdyṯA* 村（Arīḥā 近郊）⑼	100km内	農地？	KD 1: 391（n.2）
		受益施設の門前	市街	店舗［複数］	KD 1: 391
5	Ibn al-Muqaddam	Ǧisrayni〈Djisrin〉村	ダマスクス近郊（東 7 km）	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 401（n. 1）
		al-Muḥammadīya〈Moḥammadiye〉村	ダマスクス近郊（東10km）	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 401（n. 1）
		Kaftān〈Keftin〉村⑳	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 401（n. 2）
9	Umm al-Malik al-Ṣāliḥ 1	［Bustān al-Buq‘a］（アレッポ郊外）	近郊	果樹園	KD 1: 392
		Kafar *krmyn* 村（‘Azāz 域内）	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 392
11	Muẓaffar al-Dīn Kūkbūrī	Aṯ‘āna〈Ta‘ané〉⑥⑽	50km内	農地？	KD 1: 395（n. 1）
		lsyn	不詳	農地？	KD 1: 395
13	Fāṭima Ḫātūn	Kafar Ta‘āl〈Kefer-ṭal〉⑭	50km内	農地？	KD 1: 402
16	Šamsīya	Kafar *d‘Al* 村	不詳	農地［1＋1/4f.］	KD 1: 398
		Sūq al-Ḥabbālīn⑾	市街	店舗［複数］	KD 1: 398
21	Iqbāl	Bānaqūsā ［Ḥammām al-‘Atīq］⑿	近郊	浴場［1/4？］	KD 1: 401

34	Šayḫ Ḫiḍr	Anṭākīya⑱	100km内	不詳	KD 1: 407
40	Taġrī Birmiš	受益施設の門前	市街	店舗[複数]	KD 1: 416
41	Duqmāq	al-*mAlkyT*村（‘Azāz域内）	50km内	農地？	KD 1: 411
42	Bahādirī	al-Nayrab門近隣	市街	店舗[複数]	KD 1: 424
		al-Nayrab門近隣	市街	隊商宿（qāsārīya）	KD 1: 424
45	Ḥāǧǧ Balāṭ	Sūq al-Milḥ	市街？	市場[1/4]	KD 1: 415
		Ma‘ardibsa村〈Ma‘ardis〉㉖	100km内	農地[1/4]	KD 1: 415
		Bāsūfān〈Bathoufan〉⑦	50km内	農地[1/2]	KD 1: 415
		al-Nayrab⑪	近郊	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 415
48	Ǧallūm 2	A‘nadān（‘Anadan〉⑧	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 425
52	Maġāriba	*ḥndArAt* 村	不詳	農地？	KD 1: 412
53	Muẓaffar	Kafar *d‘Al* 村	不詳	農地？	KD 1: 422
55	Qalandarīya	‘Ayn *ArzT* 村	不詳	農地？	KD 1: 412

孤児の教室（表A-4）		所在地	位置区分	種類	典　拠
12	Darb al-‘Udūl	*kkrw*	近郊	果樹園	KD 1: 440
13	Ibn al-Ṭayyār	*al-mkblsT*（内城の下）	市街	隊商宿（qāsārīya）	KD 1: 441
14	‘Imād al-Dīn b. al-Turǧumān	Ḥawar〈Ḥawar〉⑯	50km内	農地？	KD 1: 440
		Bānaqūsā⑬	近郊	不詳	KD 1: 440

墓廟（表A-5）		所在地	位置区分	種類	典　拠
1	Ḫaššābīya	Billīramūn〈Beleramoun〉⑩	近郊	農地(mazra‘a)	KD 1: 427
2	Wālī	Dārat ‘Izzī 村〈Darit ‘Izze〉⑨	50km内	農地？	KD 1: 437
7	Sūdī	Sūq al-Ḥarīr al-Qadīm（Sūq al-Naḥḥās）⑬	市街	店舗？	KD 1: 434
14	Yašbakīya	受益施設の近隣	市街	市場	KD 1: 427; Sih: 229
		[総督が居住する苑]	近郊？	庭園（ǧunayna）	KD 1: 427
19	Bunay Aybak	Bālā 村（‘Anǧāra⑮域内）	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 439（n. 1）
21	Ḫaṭīb b. al-‘Aǧamī	al-Aḥaṣṣ 山地	50km内	農地？	KD 1: 434
23	‘Ilmīya	Bāšanṭrā 村〈Beshantra〉⑰	50km内	農地（ḥiṣṣa）	KD 1: 429
		Suwayqat Ḥātim	市街	隊商宿（qāsārīya）	KD 1: 429
27	Ṣafawīya	Quwayq 川沿い	近郊	製粉所（raḥā）	KD 1: 428

病院（表１）		所在地	位置区分	種類	典　拠
1	Nūrī	Ma‘arāṯā村〈Ma‘arata〉⑭	50km内	農地？	KD 1: 447(n.1)
		Wādī al-‘Asl（Sim‘ān山地内）	50km内	農地（mazra‘a）[1/2]	KD 1: 447; Sih: 226
		al-*ḥmyrA*（al-Maṯḫ域内）	50km内	農地（mazra‘a）[5f.]	KD 1: 447; Sih: 226
		Ġarbīya（Ǧinān門外）	近郊	製粉所（ṭāḥūn）[1/8]	IN 2: 68; KD 1: 447; Sih: 226
		Kafar Nāyā〈Kefr Naya〉④	50km内	農地（mazra‘a）[5f.]	Sih: 226
		Mazra‘at al-Ḫālidī（al-Maṯḫ 域内）	50km内	農地（mazra‘a）[1/3]	Sih: 226
		Mazra‘at al-Ḫālidī（al-Maṯḫ 域内）	50km内	製粉所（ṭāḥūn）	Sih: 226
		Abū *mdAyA*（‘Azāz域内）	50km内	農地（mazra‘a）[8f.]	Sih: 226
		al-Farzal〈Ferzel〉㉗	50km内	農地（mazra‘a）[12f.]	Sih: 226
		Bayt *rA‘l* 村（al-Ġarbīyāt）	近郊?	農地[1/3]	Sih: 226
		Sūq al-Hawā’⑮	市街	店舗（dakākīn）[10]	Sih: 226
		アレッポ郊外	近郊	農地？	IN 2: 68; KD 1: 447; Sih: 226
2	Arġūnī	Biniš 村〈Binish〉(24)	50km内	農地？	KD 1: 449

凡例および注

・各受益施設は種類毎に設立年代順に配列した。
・施設種類見出しの後ろに，対応する表の番号を（　）に入れて示した。
・病院以外の施設名と番号は「谷口 2005」の表Ａ-１～Ａ５に，病院の番号は本稿の表１に対応している。
・所在地欄の［　］内は施設名。〈　〉内は Dussaud 1927 の表記。丸囲み数字は図１の番号に対応している。
・読み方が不明の部分は，アラビア文字の綴りを斜体で示した。その場合，Aはアリフ，Tはター・マルブータを示す。
・物件の数または収益権の比率，面積が判る場合は，種類欄の［ ］内に記した。f. は faddān の略。
・ワクフ財種別の訳語で表中（　）内に示さなかったものを以下に掲げる。市場：sūq；店舗［複数］：ḥawānīt；浴場：ḥammām；果樹園：bustān。

(1) 現在の Sūq Bāb Anṭākīya。
(2) 現在の Sūq al-Ḥibāl の南か。
(3) KD の校訂注に従い Sim‘ān 山地の al-Zarba 地区にある地名と推定。
(4) KD の校訂注に従い ‘Anadān(⑧)域内の *bšqAtyn* と推定。
(5) Bulduqīya 2と共有。
(6) Ṭawāšīya(Asadīya 2)との共有。
(7) Firdaws と共有。
(8) 受益施設が閉鎖されたため，Qilīǧīya 1 へ移された。
(9) KD の校訂注に従い Arīḥā近郊の *AbdytA* 村と推定。
(10) KD の校訂注に従い現在の Ṭa‘āna と推定。

⑾　ウマイヤ・モスクの南側にある現在の Sūq al-Ḥibāl か。
⑿　3/4は Ǧamālīya のワクフ。
⒀　「ウマイヤ・モスクの南側に位置する」という注記あり。現在の Sūq Ḫān al-Naḥḥāsīn か。
⒁　50km圏内に同一地名が複数存在。
⒂　現在の Sūq Bāb Anṭākīya。７件はウマイヤ・モスクと共有。

表５　アレッポにおける宗教施設設立者――12-15世紀――

ザンギー朝時代以前

アレッポの支配者		施設	経歴（アレッポとの主な関わり）	典　拠
1	Badr Dw. Sulaymān	学１	515(1121/22)年アルトゥク朝アレッポ総督。516-517(1122/23-1123)年単独支配。	ZH 2: 207, 209, 212
2	Šams al-Ḫawāṣṣ Lu'lu'	修１	セルジュク朝アレッポ政権に仕えたハーディム。508(1114)年に君主を暗殺して実権を奪う。511(1117)年殺害。	AH: 93; BT 4: 1984-1985; 谷口1998: 38

ザンギー朝時代（1127-1183年）

アレッポの支配者		施設	経歴（アレッポとの主な関わり）	典　拠
3	Nūr Dn. Maḥmūd	学３-８,10,11 修４,６,７ 病1	ザンギー朝シリア政権初代君主。541(1146)年即位当初はアレッポが首都。549(1154)年に獲得したダマスクスへ移り、569(1174)年同地で没。	省略
4	Maǧd Dn. Ibn al-Dāya	学2 修2,3	有力軍人。541-565(1146/47-1169/70)年，総督在任。565年没。	AH: 94; 大稔1988: 256
アレッポの支配層（文官以外）				
5	Sa'd Dn. Kumuštakīn	修10	第２代君主Mk al-Ṣāliḥ Ismā'īl幼少時に権勢を振るった有力軍人。573(1177/78)年没。	AH: 94; KD 1: 396-397; WA 7: 168; ZH 3: 35
6	Umm Mk. al-Ṣāliḥ	学16 修９	第2代君主サーリフの母。578(1182)年以降没。	AH: 93, 122
7	Ḥusām Dn. Ṭumān al-Yārūqī	学14	サーリフ麾下のアミール。579(1183)年ラッカへ移ったがアレッポにも邸宅があった。	ZH 3: 25, 45, 66, 91
8	Ǧamāl Dn. Šāḏbaḫt	学19,24	内城総督。サーリフの後見人として権力を振るった。589(1193/94)年以降没。	BT 4: 1822-1823; IN 4: 300; WA 7: 165; ZH 3: 54-55

支配層(アレッポにおける職位不明)				
9	Asad Dn. Širkūh	ジ 3 学 9	有力軍人。546(1169)年ファーティマ朝征服後まもなく没した。主要なイクターはヒムスにあった。	WA 2: 479-481
10	ʻIzz Dn. ʻAbd Mk. al-Muqaddam	学12 修 5	モースル政権下で Sinǧār の城塞総督。541(1146)年ヌール・アッディーンに帰順。	AH: 116; ZH 2: 296-297; 大稔 1988: 250
11	Sunqurǧāh al-Nūrī	修 8	ヌール・アッディーンのマムルークか。554(1159/60)年以降没。	KD 1: 400
12	ʻAfīf Dn. ʻAbd al-Raḥmān al-Nūrī	学13	ヌール・アッディーンのマムルークか。566(1170/71)年以降没。	AH: 116-117; KD 1: 354; ND 2: 178
その他(アレッポと関係あり)				
13	Faḫr Dn. Muḥammad Ibn al-Ḫaššāb	墓 1	ハッシャーブ家の一員。12世紀初頭に住民指導者として活躍。519(1025/26)年没。	AH(H): 35; 谷口1996: 83-85

アイユーブ朝時代(1183-1260年)

アレッポの支配者		施設	経歴(アレッポとの主な関わり)	典 拠
14	Mk. al-Ẓāhir Ġiyāṯ Dn. Ġāzī	学17,28,33	アレッポ政権初代君主。579(1183)、582-613(1186-1216)年、在位。	省略
15	Ḍayfa Ḫātūn	学41 修19	ザーヒルの后。634(1237)年ナースィルが幼少で即位すると実権を掌握。640(1242)年没。	Humphreys 1977: 229, 452(n. 66); IN 2: 212; ZH 3: 225 ff.
アレッポの支配層(文官以外)				
16	ʻIzz Dn. Ašūd al-Yārūqī	学23	12世紀後半に活躍したアミール。トゥルクメン系ヤールーキーヤ氏族。	WA 6: 117; ZH 3: 61, 67, 71, 129-130
17	Sayf Dn. ʻAlī	学18,22,30 修12	ザーヒルとアズィーズの2代にわたって仕えた有力アミール。622(1225)年没。	AH(H): 38; dRD: 145-146; IN 2: 191, 4: 325-330; ZH 3: 144 ff., 178, 185
18	Ḥusām Dn. Maḥmūd b. Ḫutlū	学29	šiḥnaを務めた軍人。ハナフィー派有力家系シフナ家の祖。626(1128/29)年没。	太田 1990: 91, 101(n. 23); Sih: 113-114
19	Šihāb Dn. Ṭuġril	学31,34 修14,15	ザーヒルの解放奴隷。628(1230/31)年までアタベクとして影響力を保持。631(1233)年没。	IN 2: 202-203; ZH 3: 170 ff., 211, 215
20	Ḥusām Dn. Bulduq	学38,45	アミール。ザーヒルの解放奴隷。635(1237)年以降没。	AH(H): 108; ZH 3: 195
21	Ǧamāl Dw. Iqbāl	学43 修21	ダイファ・ハートゥーンの解放奴隷。彼女に登用され権勢を誇った。641(1243)年没。	BT 4: 1952-1953; ZH 3: 225, 243, 266-267
22	ʻAlāʼ Dn. Ṭāy Buġā	修23	ザーヒルのマムルークと推定される。650(1252)年没。	KD 1: 400; AH(H): 94
23	ʻAlāʼ Dn. ʻAlī	学42	ダイファ・ハートゥーンの側近。654(1256)年没。	AH(H): 120; IN 4: 413-414

24	Fāṭima Ḫātūn	修13	第2代君主アズィーズの妻。スルターン=カーミルの娘。656(1258)年没。	AH(H): 95; KD 1: 402
25	Šams Dn. Lu'lu'	学44	アミール。第3代君主ナースィル幼少時の後見人の一人か。13世紀前半に活動。	AH(H): 109; ZH 3: 225, 252, 264
26	Ḥusām Dn. al-Ḥasan al-Qaymarī	学47	アミール。クルド系カイマリーヤ氏族。646(1248/49)年以降没。	AH(H): 109; Humphreys 1977: 275, 341
27	Aydimur al-Ẓāhirī	墓2	13世紀前半にアレッポ政権に仕えた軍人。wālī Ḥalab という肩書きを持つ。	KD 1: 437
28	'Īsā al-Kurdī al-Hakkārī	ジ7	šiḥnat al-šurṭaを務めた軍人。	AH(H): 38, KD 1: 235
支配層(アレッポにおける職位不明)				
29	Ḥusām Dn. Muḥammad	学15	サラーフ・アッディーンの甥，アミール。ナーブルスをイクターとして得る。587(1191/92)年没。	BT 1: 62; KT 12: 77; Humphreys 1977: 421, 426
30	'Izz Dn. Ǧurdīk	学20	サラーフ・アッディーン麾下のアミール。588(1192)年エルサレム総督に就任。594(1198)年没。	IN 2: 79, 81-82, 110; KD 1: 351-352; KT 11: 557, 12: 87, 134; Humphreys 1977: 78-79, 101
31	Muẓaffar Dn. Kūkbūrī	修11	サラーフ・アッディーンに仕えた軍人。アルビルを得るが後に奪われる。630(1233)年没。	WA 4: 113-120
32	Badr Dn. Badr al-Ḫādim	学39, 40	アサド・アッディーン・シールクーフの解放奴隷。632(1235)年以降没。	AH(H): 117; IN 4: 247
33	Ibn al-Tinnabī	修20	アミール。639(1241)年没。	AH(H): 94
34	Fuṭays	学48	アイユーブ家の解放奴隷でアミールになった人物の息子。649(1251/52)年没。	AH(H): 95, 118
35	Muǧāhid Dn. Muḥammad	学49 墓6	アミール。650(1252/53)年以降没。	AH(H): 118; IN 4: 403-404
36	Badr Dn. Badr	学25	サラーフ・アッディーンと女奴隷との子である'Imād Dn. Šāḏī の解放奴隷。	AH(H): 106; RD: 711
37	Bayram	修32	サラーフ・アッディーンの叔母 Sitt Ḥārim のマウラー。	AH(H): 95; KD 1: 401
38	Bint Sābiq Dn. 'Uṯmān	修25	シャイザル領主の娘。父はヌール・アッディーン治下のアレッポ総督マジュド・アッディーン(4)の一族。	AH(H): 61; ZH 3: 17-18; 135; 大稔1988: 67-68
39	Zumurrud Ḫātūn	修27	サラーフ・アッディーンの姪。	AH(H): 95
40	Bint Wālī Qūṣ	修26	クース総督の娘。	AH(H): 95; KD 1: 403
41	al-Kāmilīya zawǧat 'Alā' Dn.	修24 墓5	ダイファ・ハートゥーンの側近 'Alā' Dn. 'Alī の妻か。	AH(H): 96; KD 1: 404

アレッポの文官				
42	Bahā' Dn. Yūsuf Ibn Šaddād	学26, 27 修17	591(1194/95)年以降ワズィールやカーディーを務め，マドラサでも教えた。632(1234)年没。	WA 7: 84-100
43	Ğamāl Dn. 'Alī Ibn al-Qifṭī	墓4	598(1201)年より断続的にワズィール等の高官を歴任した。646(1248)年没。	KD 1: 430; EI^2, "Ibn al-Ḳifṭī ..."
44	Mu'ayyid Dn. Ibrāhīm Ibn al-Qifṭī	学50	646(1248)年にワズィールに就任。658(1260)年に没するまで在職。(43)の弟。	Eddé 1999: 314
45	Kamāl Dn. 'Umar Ibn al-'Adīm	学46	アブー・ジャラーダ家出身。マドラサ教授のほか外交使節としても活躍。660(1262)年没。	谷口 1996: 73-74
その他(アレッポと関係あり)				
46	Šams Dn. Aḥmad Ibn al-'Ağamī	学21 修16 墓3	アジャミー家のウラマー。631(1233/34)年没。	AH(H): 94; Eddé1991: 67-68
47	'Izz Dn. al-Murtaḍā	学53	アレッポのナキーブ家系に生まれる。ナキーブとヒスバを歴任。653(1255)年没。	dRD: 189; IN 4: 410-411
48	Šaraf Dn. 'Abd al-Raḥmān Ibn al-'Ağamī	学32	アジャミー家のウラマー。ザーヒリーヤ学院のナーズィルと教授を歴任。658(1260)年没。	Eddé 1991: 67-68; 谷口 1996: 80-81
その他(アレッポとの関係不明)				
49	Ibn Rawāḥa	学36	ダマスクスの大商人。622または623(1125/26)年に同地で没。	*Dāris* 1: 265-267; IN 4: 45, 330; dRD: 149; WA 3: 245

マムルーク朝時代(1260年-15世紀後半)

上位権力者(スルターン)		施設	経歴(アレッポとの主な関わり)	典 拠
50	Mk. al-Nāṣir Muḥammad	学56	スルターン。693-694,698-708,709-741(1293-1294,1299-1309,1310-1341)年在位。	省略
51	Mk. al-Ẓāhir Ḫušqadam	修44	スルターン。865-872(1461-1467)年在位。	省略
52	al-sulṭān	墓22	ワ-キフとしてal-sulṭānとのみ記される。	KD 1: 437
アレッポの支配者(総督)				
53	Sūdī al-Ğamdār	墓7	712-714(1312-1314)年、総督在任。714(1314)年アレッポで没。	IN 2: 298-300; KD 1: 434
54	Alṭun Buġā al-Ṣāliḥī al-Nāṣirī	ジ9	714-727(1314/15-1326/27)、731-739(1330/31-1339/40)年、総督在任。742(1341/42)年没。	KD 1: 235; *Manhal* 3: 53-56
55	Arġūn al-Nāṣirī	墓8	727-731(1326/27-1330/31)年、総督在任。在任中に没。	*Durar* 1: 351-352; IN 2: 311
56	Arġūn al-Kāmilī	ジ14 病2	750(1349/50)年と754(1353/54)年，総督に就任。離任年不詳。758(1356/57)年没。	IN 2: 348-349, 352-354; KD 1: 250 (n. 1), 448

57	Manklī Buġā al-Šāmsī	ジ15	763(1361/62)年と768(1366)年，総督に就任。いずれも翌年には転出。774(1372年)年没。	*Durar* 4: 367; KD 1: 243; IMA: 344
58	Sayf Dn. Ašiqtimur	学61 孤2 墓12	765(1363/64)年から781(1379/80)年にかけて5回にわたって総督として統治。アレッポで隠居し791(1389)年に没。	KD 1: 369; *Manhal* 2: 451-454; IN 2: 366; ʻAbd al-Ḥāfiẓ 2000, 2: 303
59	Yalbuġā al-Nāṣirī	ジ20	783-787(1381/82-1385/86)、788-793(1386/87-1390/91)年、総督在任。793(1390/91)年刑死。	IN 2: 370, 372, 373, 383; KD 1: 252
60	Sūdūn al-Muẓaffarī al-Ẓāhirī	ジ21	787-788(1385/86-1386/87)年、総督在任。	IN 2: 372-373; IMA: 353
61	Taġrī Birdī al-Atābakī	ジ22 孤4	796-800(1394-1397)年、総督在任。815(1412)年ダマスクスで没。	KD 1: 237; *Manhal* 4: 31-32
62	Aqbuġā al-Utrūš	ジ24	801-804(1398/99-1401/02)年、総督在任。再び総督に就任した翌月、806(1404)年に没。	DL 2: 316; KD 2: 110; Sih: 61-62
63	Duqmāq	修41	804-806(1401/02-1403)年，総督在任。808(1406)年，ハマー総督在任中に殺害。	KD 1: 411, 2: 109-110
64	Yašbak al-Yūsufī	墓14	820-824(1417-1421)年、総督在任。824(1421)年没。	IN 3: 15-16; *Nuǧūm* 14: 56, 235
65	Taġrī Birmiš	修40	839-842(1435/36-1438/39)年頃、総督在任。842(1439)年没。	IN 3: 32; KD 1: 417-421; *Manhal* 4: 58-65
アレッポの支配層(文官以外)				
66	Ṣalāḥ Dn. Yūsuf b. al-Asʻad	学57	šādd al-dawāwīn, ḥāǧib, šādd al-māl wa-l-wāqif等を歴任。745(1344)年没。	*Wardī* 2: 486; KD 1: 336
67	Mūsā b. ʻAbd Allāh al-Nāṣirī	墓9	ḥāǧibを務めた。756(1355/56)年没。アレッポの墓に埋葬された。	KD 1: 438
68	Aġilbak b. ʻAbd Allāh al-Ǧāšankīr	墓10	ḥāǧibを務めた。760年代(1358-1367年)に没。	KD 1: 435-436
69	Ṭuqtimur al-Kaltāwī	学65	amīr māʾia wa-muqaddam alf として赴任。晩年にḥāǧibを務め，787(1385)年アレッポで没。	Durar 2: 224; KD 1: 369; Manhal 6: 419-420; IN 5: 94
70	al-Ḥusayn b. Balabān al-Mihmandār	ジ8	14世紀にアレッポでアミールを輩出したミフマンダール家の一員。	IN 5: 22, 107; KD 1: 258-259
71	al-Ḥāǧǧ Balāṭ	修45	総督 Īnāl al-Yašbakī (863-865?[1458/59-1460/61?] 年在任) の dawādār。	DL 2: 330; IN 3: 50; KD 1: 415
72	Faḫr Dn. ʻUṯmān Ibn Uġulbak	ジ28	アミール，官僚。アレッポ出身。dawādār al-sulṭān bi-Ḥalab 等を歴任。885(1480/81)年没。	DL 5: 125; IN 5: 290-292; KD 1: 251
支配層(アレッポにおける職位不明)				
73	Ibn al-Ṣāḥib	孤1 墓11	軍人。学問を好み，学者と親しく交わった。765(1363/64)年没。	IN 5: 43-44; KD 1: 435

74	al-As‘ardī	修36	ハマー総督。不遇時にアレッポの ‘Abd al-Raḥmān Ibn Saḥlūlから厚遇された。773(1371/72)年以降没。	KD 1: 404; *Šuhba* 3: 47
75	Aqǧā Ḫāzindār Išbak	学70	バルスバイに仕えたマムルーク。失策を犯し逃亡。主君の没(841[1438]年)後アレッポへ到る。	KD 1: 371; Sih: 230
76	Muḥammad al-Zakī	ジ25	ハルカ兵士。15世紀初頭前後に活動。	KD 1: 263
77	Nāṣir Dn. b. Ḏī al-Qādir	学71 孤9	アミール。15世紀前半に活動。	KD 1: 441
アレッポの文官				
78	Ṣafī Dn. ‘Abd al-Wahhāb	ジ11	官僚。mušārif dīwān al-ǧuyūš al-manṣūraを務めた。733(1332/33)年以降没。	KD 1: 262
79	Kamāl Dn. Ibrāhīm	修39	官僚。nāẓir al-ǧayšを務めた。831(1427/28)年没。	KD 1: 424
80	Šihāb Dn. Aḥmad Sibṭ Banī al-Saffāḥ	ジ26	官僚。官僚を輩出したサッファーフ家に連なる。nāẓir al-ǧayš, kātib al-sirr 等を歴任。835(1432)年没。	IN 5: 184; Martel-Thoumian 1992: 202-211
81	Nāṣir Dn. Ibn Taqā	学72	官僚。父の代にアレッポへ移住。父も総督達の下で働いた。855(1451)年没。	KD 1: 338
82	Ǧamāl Dn. Yūsuf b. al-Niḥrīrī	ジ29	マーリク派カーディー。896(1491)年，在職中に没。	DL 10: 339; KD 1: 261
その他(アレッポと関係あり)				
83	Badr Dn. b. Zuhra	修34	naqīb al-ašrāf の地位を父から継いだ。762(1360/61)年没。	IN 5: 35; KD 1: 406
84	Ẓahīr Dn. b. al-‘Aǧamī	学67	アジャミー家のウラマー。774(1372)年没。	IN 5: 56-57
85	‘Alā’ Dn. ‘Alī Ibn Abī al-‘Ašā’ir	学64	ウラマー。晩年にウマイヤ·モスクのハティーブを務めた。778(1376/77)年没。	KD 1: 372
86	Ḥamza al-Ǧa‘farī	学63	サイイド。ウマイヤ·モスクのナーズィルなどを歴任。803(1400)年頃以後没。	IN 5: 228; KD 1: 217, 380
87	Šihāb Dn. Aḥmad al-Hilālī	修42	ウラマー。父の代にアレッポへ移住。841(1437)年没。	KD 1: 422-424
88	Muḥammad Ibn al-Ma‘sarānī	ジ27	アレッポの墓廟やマドラサで禁欲的生活を送ったウラマー。852(1448)年没。	KD 1: 248, 2: 211-212
89	Muḥammad b.Muḥammad Ibn al-Ḫarrāz	墓13	ウラマー。14-15世紀に活動。KDの著者の父Ibrāhīm(841[1437/38]年没)の師。	KD 1: 436
90	‘Abd al-Karīm al-Ṣūfī	ジ32	スーフィー。15世紀前半-半ばにアレッポで活動。	KD 1: 256

91	Šihāb Dn. al-Malaṭī	孤17	アレッポの有力商人。al-ḫawāǧā というラカブを持つ。852(1448)年，ルーミー・ジャーミィの修築資金を寄付。	KD 1: 243-244, 444
92	al-ḫādim	修49	アジャミー家の解放奴隷。	KD 1: 398
93	Šams Dn. Muḥammad al-Dūrī	修43	アレッポの有力商人。al-ḫāwāǧā というラカブを持つ。	KD 1: 409
その他(アレッポとの関係不明)				
94	Muẓaffar	修53	スーフィー。al-Ǧubayl の墓地に埋葬された。	KD 1: 422
95	Ibn al-Ǧazarī	ジ45	有力商人。al-ḫawāǧā というラカブを持つ。	KD 1: 259
96	al-Rūmī	ジ35	商人。	KD 1: 260
97	Ḥusayn b. Muṣṭafā	修38	有力商人。al-ḫawāǧā というラカブを持つ。	KD 1: 408

凡例および注

・Dw.: al-Dawla, Dn.: al-Dīn, Mk.: al-Malik
・設立者は，没年，施設の設立時期，活動時期などに基づいて各区分内で時系列に沿って配列した。
・施設欄の略号は次のとおり。ジ：ジャーミィ（表A-1），学：学院（表A-2），修：修道場（表A-3），孤:孤児の教室（表A-4），墓：墓廟（表A-5），病：病院（表1）。略号の後ろの数字は，該当する施設の（ ）内に示した表における番号を示す。
・典拠欄には経歴に関する典拠を示したが，Bosworth 1996に挙げられている人物については省略した。
・「谷口 2005」表A-1(1): 32 Muḥaṣṣab の設立者は「不明」となっているが，本表 no. 90 の人物に訂正する

〔付記〕 本稿は科研費（課題番号16520430）およびNIHUプログラム「イスラーム地域研究 」による研究成果の一部である。

ISLAMIC RELIGIOUS INSTITUTIONS IN ALEPPO DURING THE MAMLUKID PERIOD

TANIGUCHI Jun'ichi

The following points have been elucidated through an analysis centered primarily on the Islamic religious institutions in Aleppo during the later-Mamlukid period of the 15th century.

The majority of the funds for the *waqf* endowment that supported religious institutions was taken from the profits of commercial establishments and public baths within the city and farmlands within a 50-kilometer radius (a one or two-day walk) of the city.

Those who played a central role in establishing and maintaining these institutions were the governors and the residents of the city who had a direct interest in the region. The governors established large-scale religious institutions in the city as did wealthy merchants, and they bore the costs of their upkeep and repair. Those who could not establish such facilities on an individual basis made contributions in the form of small donations of money or labor.

On the other hand, it was not only the case during the various dynasties that had only nominal suzerainty, but also during the Mamlukid period when the governor was sent from Cairo to Aleppo, that sultans seldom became involved in the establishment and maintenance of religious institutions in this city.

This same tendency could also be seen in the central Syrian city of Damascus. The holy city of Jerusalem on the other hand attracted many donors who had no direct interest in the locality and thus it differed from Aleppo and Damascus. The fact that the financial basis of religious institutions was chiefly grounded in the locality was a point in common among these three cities.

In conclusion I point out the fact that although there was a concentration of the establishment of religious institutions by powerful figures from outside Jerusalem, in the far more politically and administratively important cities of Aleppo and Damascus the Mamlukid sultans seldom established any religious institutions.